

実写映画 京大学生街という迷路でくり広げ
られるラブコメ

夜は短し歩けよ乙女

脚本 大岡俊彦
原作 森見登美彦 (角川書店)

「四畳半神話大系」で有名な、森見登美彦氏の小説原作である。いつものように、森見の京大ワールドを舞台にした話だ。（「四畳半」から樋口、羽貫、みそぎの相沢が再登場）

学生時代はいつも迷っている。

学生時代はいつも切実だ。

この物語は、とある黒髪の乙女に恋したさえない男が、その後ろ姿をひたすら追い続ける話である。京大界限の珍人奇人阿呆どもが、二人の間を次々に邪魔してゆく。彼女の心を射止めるために、モテない男が全力であさつての方向に走る。それはいずれ奇跡を起こし、彼女はふりむくこととなるのだ。だが二人は常にすれ違う。観客は、そのすれ違いに感情移入してゆく仕掛けだ。

これは典型的なすれ違い恋愛ものであり、彼らが初デートにこぎつけるまでのラブストーリーである。

コメディタッチで描かれるファンタジー風味のガジェット（三階建て電車、天狗の芸、古本の天空城など）と、京都の四季や迷路のような古い学生街が交錯して、ポップでキュートで摩訶不思議な世界観をつくりだす。

京大で7年を過ごした大岡俊彦（劇中の映画サークル「みそぎ」のモデル、「雪だるまプロ」出身の、唯一のプロ映画監督）がこの脚本を書き、実写映画化を熱望している。

若者むけの元気な映画をヒットさせて、日本を愉快に知的にしようではないか。

こうして出逢ったのも、何かのご縁。

登場人物

狭間有一（21） 京大三回生。理屈ばかりの頭でっかち。

黒木ちひろ（19） 京大一回生。オモチロイ事を求めている。

樋口（26） 自称天狗の弟子。古い浴衣を着る八回生。

羽貫（27） 酒豪で巨乳の、明るい色気の人。

葦沢（21） 有一の親友で、NF実行委員長。

パンツ総番長（23） 劇団主宰の重鎮。

須田紀子（20） 恋する行動派。

少年（10） 古本好きの天才。

小久保（20） 「偏屈王」の小道具係。

千歳屋（55） 古本屋。閨房調査団。

高坂（22） 詭弁論部員。

老学者（80） 古書マニアの陰気な人。

京福（20） 電車マニアの学ラン男。

赤川康夫（28） 婚約ホヤホヤ。

東堂奈緒子（28） 婚約ホヤホヤ。

本ニンゲンたち 古本の擬人化キャラ。

相沢（21） 「みそぎ」の部長。

赤川（60） 顔の広い京大OB。

東堂（55） 調子のいいおやじ。

李白（70） 裏街の顔役。金貸しの趣味人。

○京都の冬の夜明け

凜とした冬の濃い闇へ、東山から一条の朝日が射す。

京都の街が朝に目覚める。

木屋町飲み屋街。糺の森。京大時計台、その周辺の下宿街。この物語の主要な舞台に、朝日がリレーする。

有一NA「朝はどこにでもやってくる。へべれけの飲み屋街にも、有史以来眠る森にも、屹立する時計台にも。全ての縁でつながる人々の住む、全ての所へ」

大宮九条で朝日を眺める有一(21)。

有一「…」

北白川北バス前で朝日を見るちひろ

(19)。缶コーヒード両手を暖める。

ちひろ「…なむなむっ」

有一NA「その日、ドミノ倒しのようにこの街へ朝がやってくるのを我々は見た。正確に言うと、同じ朝焼けを別々のところで見たのをちに知った。やむにやまれぬ衝動に駆られ、夜じゆう歩きたおして同じ朝日を見る。これを運命と言わずして、何を運命と言うべきか」

夜の闇が、美しい朝焼けにくつがえさ
れてゆく。

○メインタイトル「夜は短し歩けよ乙女」

○京都の四季と恋人たちの風景

それぞれの景色に、広告のようにオシヤレで輝かんばかりのカップルたち。

有一NA「京都は恋する街である。春は疏水の綿菓子のような桜からはじまり、串八の新歓コンパ北バツのカラオケで恋は芽生え保津峡を下る。葵祭が終われば、哲学の道の蛍まですぐそこだ。夏こそ祇園祭、サークルの夏合宿、五山の送り火で燃え盛る。鈴虫寺の秋の声を聞けば、植物園の大芝生

で膝枕、鞍馬の火祭、真如堂詩仙堂神社仏閣の数だけ紅葉狩れ。聖なる一大イベント、クリスマスイブでクライマックス大爆発。あとは晦日正月バレンタイン、吉田神社節分の鮎の塩焼きと南禅寺湯豆腐が二人を暖めるしかないではないか。春夏秋冬八百万、ありとあらゆるうふんが待ち受ける。鴨川を走り、デルタで座り、岡崎動物園の観覧車と進々堂で手を握る。無限の時間があってもなお足りぬほど、京都は恋に満ち溢れる」

一列に行進する、春夏秋冬のカップル。

○有一の下宿、内々外

一転、暗い四畳半。万年床の隅に体育座りして本を読む男、有一。

有一NA「人間には二種類いる。カップルか、そうでないかだ。そうでない人種にとっての京都とは、無限に持て余す時間のことだ。四畳半に籠城したままのたうち回るのみ」

周囲に積まれてゆく本。哲学、政治、文学、経済、科学、しばしばエロ本。突如、壁がめりめりどーんと外れる。二階の四畳半が露出。地上では、楽しそうな春夏秋冬のカップル。

有一NA「壁ひとつ隔てたカップルという人種とは、永遠に交わる事のない、数学で言う『ねじれの位置』にあるのではないか」
有一「(哀しく見つめる) …」

○京大カップルの聖地、喫茶「進々堂」外

大きなガラス窓から中を覗き込む有一。中は古くて落ち着いた内装。大テーブル長椅子のつくりなので、カップル達は自然と隣同士に座る。
有一、菫沢(21)ほか、モテナイ男軍団が窓にへばりつく。

有「N A」陽の光を浴びてはならぬ、ゾンビの如き我々はかつてとある実験をした」

○春の鴨川

カップル達で溢れる鴨川。対岸から、川岸に座る彼らを双眼鏡で除く有「一

有「よし、挟め」

カップルの両脇をモテナイ男で挟む。

居づらくなったカップルは去る。

有「今だ！」

空いたスペースへモテナイ男が座る。

歓喜する有「一、モテナイ男軍団。

有「N A」論理的鴨川オセロに勝利した我々は、カップルの聖地、進々堂へ挑む」

○進々堂、前々内

作戦の図を前に団結するモテナイ軍団。

有「一、いいか、これが対カップルシフトだ。隣同士に座らせぬよう、長椅子の真ん中を占拠せよ」

だが、カップル達はテーブルの角かどに座り、90度で向かい合う。

有「N A」隣同士よりも更に膝をつきあわせたいチャイチャを、全員が間近で見ることの地獄」

モテナイ男たち「∴（下を向く）」

○タイトル「春」

○有「一の下宿、内

蕪沢「わはは。そんなこともあったな！」

四畳半で鍋をつつく有「一と蕪沢。

有「一、あつたなではない。俺は、一人二人と出た裏切り者のことを決して忘れん」

インサート。進々堂の外にいた男たちが次々に消え、中のカップルになる。

有「一、結局俺一人が、不毛で不遇で不健康

な砦を死守し続けている」

インサート。隣の葦沢も、女の子が手を引いて去る。有一は一人冷たいガラス窓にへばりつく。

葦沢「彼女とは名古屋と遠距離だしさ…」

有一「過去の裏切りのことを責めているのではない。今貴様に聞きたいのは、どうやって成功したのか、その方法だ」

葦沢「？」

インサート。ちひろの輝く笑顔。

有一「…恥を忍んで言う。三回生にもなって、サークルの新勧活動に精を出した」

葦沢「(鼻で笑う)」

有一「笑うがいい！ 桜咲く時計台で、神が与えたもうた奇跡に俺は出会った」

○回想、春の時計台

色々なサークルの新歓集合場所。

その中の『京都を歩く会』。

有一「狭間有一。三回生」

ちひろ「黒木ちひろと申します(ぺこり)」

まるく拳を握るその姿、輝く笑顔。

有一の魂は奪われた。

ちひろ「…あっ」

有一「？」

有一の右まぶたに桜の花びら。

ちひろ「しばし、動かないでください」

花びらをとろうとし、そのまままぶたにキス。

○(回想おわって) 有一の下宿、内

葦沢「待て待て待て待て。途中から妄想が入ってるぞ！」

有一「ばれたか。桜は自分で取った。だが問題はそこからだ」

インサート。ちひろの周りを後輩の男達が囲む。教室の例会でも、ちひろを男達が囲み、有一はその中に入れない。

有 一 「爾来、ひと言も話せていないのだ」
 菲 沢 「はあ？」

有 一 「我が才覚をもってすれば、巧妙な話術で夢中にするなどたやすいのに！ 文学から哲学談義に至るまで、彼女の心は崇高で深遠で稀有な魂の、俺という存在に熱くなること必定。蔷薇色のキャンパスライフが始まり、やがてノーベル賞に至るまで……」

菲 沢 「…なにが聞きたい」

有 一 「その最初のひと言をどう話すかだ」

菲 沢 「…」

有 一 「彼女が今週、学部の飲み会に出席する事が分かり、もぐりこむ手配をした。そこならサークルの男どもは来ない」

菲 沢 「おう。チャンスじゃないか」

有 一 「で」

菲 沢 「…流れだな。男女の仲は流れで決まる。計画はたいがい無意味だ」

有 一 「うむっ！」

○木屋町の寺の前、夜

筆で大書した今月のひと言『臨機応変』

有 一 「うむっ！」

○木屋町四条下ル飲み屋、宴会場

中央の席には、お姫様だっこで座る

カップル、康夫と奈緒子。

垂 幕 『祝・赤川康夫、東堂奈緒子両君ご婚約』

司 会 「二人のアツアツぶりに黒焦げにされる我々ですが、その運命の出会いとは、単なる飲み会でした…」

遠くの席からほぞを噛む有 一。既にちひろを男たちが取り巻いているのだ。

席を立ち近づこうとするが、行列が出て来ていて、最後尾に並べと指さされる。

有 一 「…うむっ」

周りを囲む男達に、親指を中に入れた
まるい拳を見せるちひろ。

ちひろ「これは、おともだちパンチというの
です。普通の鉄拳はこうです。しかし暴力
は暴力を呼び、結果憎しみは遼原の火の如
く。(おともだちパンチにして)ところが
憎しみのあぎとを中に折り込むだけで、途
端にかわいくて丸いものに。これは、お友
達になるためのパンチです。そうやって美
しく調和のある人生が生まれるのです」

男 1「…それよりも、ハイデガーの実存と
は…」

男 2「ルサンチマンによるインティファー
ダが…」

男 3「ラカン派のシニフィアンとシニフィ
エだよ」

ちひろ「…」
ちひろNA「皆さん、どうして他人の話ばか
りで自分の話をしないのでしょうか。もしか
して、私は箸にも棒にもかからぬオモチ
ロくない朴念仁なのでしょうか。私の話が
聞かれること、稀なのです」

カタツムリの殻をいじりながら、男達
の話聞くちひろ。

司会「ではこのへんでお開きに」

有 一「(列の最後尾のまま)うむっ!？」

○店の外、夜

ちひろは一人抜けて、歩いてゆく。
気づいた有一は後姿を追いかける。

○木屋町四条(阪急入口前)、夜

人々でごった返す金曜の夜。
ギターを鳴らすアマチュアバンド。
周囲を見渡すちひろ。隠れる有一。

○バー「月面歩行」前、夜

1 ショット200円の看板を見て、二足歩行ロボットの踊りで踊るちひろ。物陰から見ると有。

と、肩をたたかれる。振り向くと小柄な老人、李白(70)。

李白「(有一の後方に目をやり)アレ? 舞妓さんで生で見ると意外と…」

有「(思わず後ろを確認しよう)」

その隙に、李白は有一のベルトを一瞬で外してズボンを下ろす。

すばやく後ろにまわり、膝かっくん。

転がされる有一。すばやくズボンをはぎ、逃げる李白。

有「えっ? :何? えっ?」

李白「青年よ! 夜の木屋町は妖怪が出るぞ! かっかっかっ」

下半身パンツ一丁で転がる有一。

有「:はあっ?!」

○バー「月面歩行」内

バーテン「ホットバタードラムです」

「一気飲みするちひろ。酔いの花が咲く。」

バーテン「バカルデイです」

「一気飲みしてうっとり。同じく酔いの花とたわむれる。」

と、隣の席に風呂敷包みをどさりと置き、東堂(55)が声をかけてくる。

東堂「さつきからラムのカクテル専門だねお嬢さん」

ちひろ「私は七つの海が全てラム酒であったらと思うほどラムを愛しております。ここなる瓶ごと牛乳のように腰に手を当てて一気飲みするもやぶさかでなく」

東堂「(笑)やればいいじゃない」

ちひろ「乙女の慎みというものです。それに財布に一抹の不安を抱える学生の身分」

「図々しく隣の席に座る東堂。」

東堂「おじさんが苦学生に一杯おごろう。」

「そうだ、偽電気ブランという名酒をご存じ」

か？」

ちひろ「いえ。偽？」

東堂「その色は摩周湖より透明で曇りなく、
されど鼻腔をくすぐる大輪の花のような薫
りだけが体を通り過ぎる。この界限では有
名な…（棚を見る）」

バーテン「あいにくと品切れでして」

ラベルつきの空瓶。

ちひろ「偽、というのは」

東堂「大きな声では言えんが密造酒でね。

（バーテンに）濃いいラムふたつ」

二人は乾杯する。

東堂「人生に一番大事なものは何か」

ちひろ「若輩者の私に何がわかりましょう」

東堂「…笑顔だよ。さあ笑って」

ちひろ「？（ひきつった笑顔）」

東堂「わはは。面白いねきみ」

ちひろ「！オモチロイですか！？」

東堂「（握手）東堂だ」

ちひろ「黒木ちひろと申します」

手を離さずにやにやしている東堂。

○木屋町、路上の片隅、夜

ビールケースで下半身を隠し、路地に
潜伏する有。

有「友よ。この流れにどう乗れと！？」

○（再び）バー「月面歩行」内

ちひろ「はあ。人生とはかくも上り坂と下り
坂が」

東堂「そうだ。そもそも李白という胸糞悪
い爺いに金を借りたのが間違いだった」

バーテン「（小声で）李白さんの悪口をこの
辺りでは言わん方が」

東堂「（棚の瓶を見て）偽電気ブランでひ
と儲けた金で、法外な金貸しだ」

インサート。東堂錦鯉センターの錦鯉
達と東堂。

東 堂「バブルの頃は金次郎や優子にベント並の値がついたものだがね。この不景気でも、手に鱈を取って借金を返そうとしたその矢先」

ちひろ「…矢先」

東 堂「(ガラスの氷をくるくる) 竜巻だ」

○回想、東堂錦鯉センター

竜巻が、池の鯉と水をさらって上空に巻き上げていく。

東 堂「優子！ 次郎吉！ 貞治郎！」

○(再び)バー「月面歩行」内

東 堂「竜巻が回っても首まで回らん。別れた女房とも連絡はとれぬままだ。風の噂に、娘が結婚するという。…あんたぐらいの年になったかな」

ちひろの手を握る東堂。

東 堂「だがどん底でも、大事な事がある」

ちひろ「？」

東 堂「(ニイ、と笑い) 笑顔だよ」

ちひろ「東堂さんの笑顔には深い意味があったのですね！」

東 堂「人生は笑顔から生まれるのだ！一緒に人生頑張ろう！(おおげさに握手)」

ちひろ「がんばりましょう！」

東 堂「頑張ろう！(抱きつく)」

ちひろ「はい！？」

東 堂「頑張ろう！(弾みで胸をもむ)」

ちひろ「ん？ ちよつと！」

東 堂「頑張ろう！(笑顔で胸をもむ)」

ちひろ「と、東堂さん！？」

○木屋町の路上、夜

偏屈王「己を守る鎧ははがされ、我は愛しき人を見失った」

さまよう有一、足を止める。

路上演劇の最中。主役の偏屈王（パン
ツ総番長・23）の独白。上半身裸で
下は西洋風の鎧。

偏屈王「こうしている間にも、夜の妖怪ども
は純真な彼女をだまくらかして、どこぞの
オシャレなバーで胸などもんでいるのでは
ないか！ だがこの私の何もなさはどう
だ！ 奇跡の剣とかないのか！ 大器晩成
など聞きあきた！ 今死ねばこれが人生の
ピークか！」

客笑う。有一思わず拍手。

偏屈王「（有一に）ありがとう裸の同志」

下半身パンツ一丁の有一を見て、どつ
と笑う見物人。

小久保（20）「撤収！ 警察来た！」

警察官来る。あわてて逃げる有一。

○バー「月面歩行」内

ちひろ「と、東堂さん！ ちょっと！」

東堂の頭を張る羽貫（27）。

羽貫「コラ東堂！ またこの時期の何も知
らない女学生の乳をだましてもんで！」

東堂「なんだあんたか。だますとは人聞き
の悪い」

ちひろ「東堂さんはきつとお酒が過ぎたので
す！ 東堂さんの悲痛な人生に比べれば、
たかがお乳のひとつやふたつ、まあお乳は
ふたつしかございませんが」

羽貫「もむならホレ（と胸を出す）」

東堂「そんな慎みのないものいらん！」

風呂敷包みをつかみ逃げる東堂。

羽貫「駄目だよう。夜の京都には妖怪ども
がうろうろしてるんだから」

とちひろの残った酒を勝手にあける。

連れの男、浴衣にキセルの樋口（2

6）、東堂のグラスを勝手にあける。

樋口「我々もその怪しい者かも知れんぞ。

樋口だ」

羽貫「羽貫だよ。河岸変えない？」

○料亭の塀の外、夜

樋口、放置自転車を積み上げて登り、
塀の奥を確認。羽貫も登る。
二人、ちひろについて来いと。

○料亭内

垂幕『詭弁論部 高坂先輩壮行会』

樋口「詭弁論部。へんてこな部だのう」

宴会は既に後半で、泥酔者続出。

羽貫「やあやあやあやあ」

その中の高坂（22）の肩をいきなり

抱き胸を押しつけ、ビールを注ぐ羽貫。

高坂「あざす。やはりですね、女は、愛
してない男と結婚するべきなのですよ」

羽貫「んん？ 聞き捨てならんねえ」

とビールを注ぎ、自分も飲み始める。

樋口も勝手に座って残りのシャンパン
を飲み始め、ちひろを座らせる。

樋口「羽貫は、めぐり会う好機をことごと

く酒瓶に変える、タダ酒の達人なのだ」

ちひろ「（シャンパンを飲む）」

高坂「では論破します！ 女の愛はいつか
冷める。永遠の愛前提の結婚など、最初か
ら矛盾なのだ。愛なき結婚こそ、逆説的に
永遠なのです！ 論理的帰結として、ナオ
コさんは俺と結婚すべきなのです！」

羽貫「ナオコさんて誰」

隣の男「…失恋したんすよこいつ」

高坂「ナオコさんナオコさんナオコさん」

転がって泣く高坂。笑う羽貫。

樋口「詭弁は失恋に効かぬようだな」

司会「えーではそろそろ、高坂先輩の前途
を祝し」

と両手を頭の上で合わせる。その場の
全員同じポーズで立ち上がる。

羽貫、樋口、ちひろもあわてて真似を。

手拍子、パン、パン、パン、パン。

詭弁論部「天上天下に正論あれど

四角四面にこの世はあらず

ウナギのようにヌルヌルと

弄する我が名は詭弁なり

詭弁詭弁詭弁詭弁

詭弁詭弁詭弁詭弁

腰をクネクネさせる奇妙な踊り。

高坂「二番！」

楽しく踊るちひろの手を引く羽貫。

宴を抜け出す三人。

羽貫「引き際がタダ酒のコツ」

ちひろ「…なんと痛快な！」

○潜水艦バー、内

カウンターで、背広姿の初老、赤川

(60)と肩を組んで意気投合してい

る羽貫。既に何本もの赤玉ポートワイ

ンをあけている。

樋口「(ちひろに)意外と貴君は飲むね」

ちひろ「(ワインを一気飲み)ゆっくり飲ん

でいてはしらふに戻ってしまいます」

樋口「どこまで飲む」

ちひろ「(むんと胸をはり)そこにお酒が

ある限り」

羽貫「じゃあさ、踊ろうよ！」

羽貫は赤川とチークを踊ろうとする。

樋口「(羽貫に)酔いが過ぎるぞ」

羽貫「おやあ？ 嫉妬してんの？」

赤川「社交ダンスは苦手だな。我流の踊りでよいか」

と、頭上に両手をあわせ、クネクネと腰を振る。

ちひろ「それはまごうかたなき詭弁踊り！」

赤川「よく知っているな！」

と、店の外に同じ踊りを踊る集団が。

高坂たちだ。気付いた赤川は店外へ。

外で同じ踊りを踊る者同士意気投合。

赤川、店内に戻ってきて、

赤川「おいOBども！ 現役詭弁論部がい

るぞ！」

奥の席から、同じように赤いネクタイの初老たちが湧いて出てくる。

赤川「なんたる偶然！ 還暦同窓会で我が踊りを継ぐものと会えるとは！」

次々出てゆくOBたち。店の外で詭弁踊り大会がはじまる。

羽貫「お酒が足りないー（ボトル、空）」
ちひろ「あ。私、偽電気ブランというお酒を飲んでみたいのですが」

赤川「偽電気ブラン！ 李白という爺いが大量に持つてるぞ！ 河岸を変えよう！」

○木屋町の路上、夜

ビールケースで下半身を隠す有一、東堂とぶつかる。

東堂「おう！？ なんちゅう恰好じゃ！ これでも使え」

と風呂敷包みを解いて、風呂敷を渡す。中から出てきたのは春画の山。

有一「（風呂敷を腰巻きにしつつ）これには訳がありました」

東堂「李白だな。これくらいの小さい老人にやられたろう」

有一「何故それを」

東堂「この界限じゃ有名人だ。地獄の李白が、夜になるとイタズラ小僧じゃ。：一杯飲まんか。ワシも奴に恨みがある」

○へんなバー

一行が飲んで踊り続ける。

赤川「（ケータイで）李白がこんぞ！」

○木屋町の路上、夜

赤川「李白はいねーがあ！」

赤川を先頭に、踊る一行が練り歩く。

羽貫「（樋口に）アレやってよアレ」

樋口「ふむ。興を添えませう皆の衆」

突然、キセルの煙に乗って空中浮揚する樋口。

ちひろ「えっ！」

口から鯉のぼりを吐く樋口。七色の吹き流しが飛びまわる。やんやの喝采。

ちひろ「樋口さんは奇術師ですか!？」

樋口「天狗をやっております」

ちひろ「まるで歩くサーカスですね! いえ、

小さな祇園祭のよう!」

羽貫「(踊りながら)見たことあんの!」

ちひろ「(踊りながら)イメージです!」

○猫とダルマのバー、内

カラオケビデオに流れる『酒と泪と男と女』。東堂と有一、ぐだぐだの泥酔。

東堂「李白の阿呆」

有一「俺の阿呆」

東堂「そもそもあやつに会わなければ」

有一「そもそも彼女に会えない」

東堂「縁を切りたい」

有一「縁など切れてしまった。もう二度と

会えないのだ」

マスター「酒と泪と男と男。…醜い」

と、ドアを開けて千歳屋(55)がや

つてくる。鑑定の道具を片手に、

千歳屋「東堂はん、お宝は!？」

東堂が指差した、春画の山。

千歳屋「(鑑定しながら)ホンマに手放すんか」

東堂「李白に借りた金がどうにもならん。

閨房調査団一生の恥」

と、千歳屋のケータイが鳴る。

千歳屋「ふんふん。おい、今夜李白はんが飲

み比べやるらしいで! いこうや! 高い

金でこうてくれるかも!」

東堂「文化の価値も分からん糞ジジイにみすみす渡すくらいならっ!」

春画をびりびりにする。

千歳屋「なにすんのや！」

東堂、残りの春画を窓から外にまく。

○先斗町、歌舞練場あたり、夜

詭弁論部を先頭とした集団は、お姫様
だっこした熱々カップルと連れの集団
に出くわす。

高坂「ナオコさんっ！」

そのカップルは、康夫と奈緒子。

赤川「康夫ではないか」

康夫「…親父」

そこへ春画が降ってくる。

樋口「京の春は、雅が散るか」

羽貫「絶景かな絶景かな」

ちひろ「東堂さん！」

二階の窓から春画をまく東堂。

東堂「ん？ 奈緒子！」

奈緒子「おとうさん」

交錯する視線。奈緒子、高坂、赤川、
康夫と奈緒子、東堂、ちひろ。

ちひろ「…なんと不思議な夜でしょう！」

二階の有一の視線の先に、ちひろ。

有一「会えた！ …もう一度会えた！」

足をもつれさせ走り出す有一。

そこへ、一筋のライトの光と鐘の音。

全員振り向くと、三階建ての電車のよ
うな、魔法の箱のような乗り物がやっ
てくる。外装は叡山電鉄の緑色とクリ
ーム色のツートン。屋上に日本庭園、
三階から銭湯の煙突と煙、外壁に男物
のズボンが大量にはためく。

有一「俺のズボン…！」

先頭に、偽電気ブランのラベルと、

「李白」の看板。停車する電車。

李白の声「偽電気ブランが飲みたい阿呆がい
ると聞いたが、タダではつまらん。わしと
飲み比べをする猛者はおらぬか。何を賭け
て遊ぶとしよう？」

ちひろ「東堂さんの借金を賭けましょう」

ええっと驚く東堂。

扉がプシューッと開く。

ちひろ「(東堂に) 言いだしっぺは私ですか。ここで会ったのも何かのご縁です」

○李白電車内、1階、李白の間

李白の間は、赤絨毯に悪趣味な骨董で埋め尽くされた洋間。天井や壁に下がる獲物コレクション。奥のソファーに埋もれる、骨董の一部のような李白。テーブルには偽電気ブランの山と、既につがれた大量の銀のグラス。

ちひろ「(ペこり) それが幻の名酒」

李白「左様。ある時は密造酒王、ある時は地獄の金貸し、その正体は夜の街のお茶目さんとはわしのことよ」

グラスを持つ。ちひろも席につく。

李白「お主が勝てば東堂の借金チャラ、負ければ倍でどうじゃ」

ちひろ、既に一杯目を一気に飲み。

ちひろ「おいしい」

李白「善哉善哉。皆も卓を囲め。今宵は大勝負になるぞ」

と一杯目をあける。

○李白電車の外、夜

1階は人だからなので、外壁をよじ登る有一。2階、3階…。足をすべらせて落ちそうになるのをこらえる。
屋上のズボンに手を伸ばし…

○李白の間

既に十個以上のグラスがあいている。

ちひろ「まるで体の中で大きな蘭の花が咲くような、猫がお腹の上ののっかったかのよ
うな幸せな味ですね」

李白「楽しめばよい。人生の日々のように。」

一杯一杯又一杯」

大輪の酔いの花が次々に咲く。

○李白電車屋上、日本庭園、夜

よじのぼってきた有一、ズボンをはき、風呂敷をヒーローのようにマントに。

有一「待ってろよ、か弱き乙女をかどわかす妖怪ども！」

○李白の間

ちひろ「なんだかはじめてお会いしたのに、李白さんは私のおじいさんのような気がしてきました」

李白「…」

ちひろ「李白さん？」

李白「（首を振り、飲めないグラスを置く）

夜は短し、歩けよ乙女」

東堂「やった！ やったよちひろちゃん！」

李白「実に愉しき夜であった。ケースを振る舞おう」

赤川「よし飲むぞ！ 詭弁論部集合！」

○李白電車内、途中の階段

宴会で沸く人々に巻き込まれる有一。

○李白電車屋上、日本庭園、夜

屋上庭園では蛍が明滅している。

東堂「助かった。本当に助かったよ」

ちひろ「私は李白さんとお酒を楽しんだだけです」

有一、もみくちやにされながら階段から顔をのぞかせる。ちひろの肩を抱こうとしている東堂を目撃。

直後、庭園の池にドボンとなにかが落ちてくる。それは錦鯉。

東堂「まさか…！ 優子！」

天空にキラキラと光。それはすぐに錦鯉の雨になる。池に落ち床に跳ね。

東堂「次郎吉！ 貞治郎！ なんて日だ！ 戻ってきた！ 戻ってきたよ！」

ちひろに抱きつく東堂。キスしよう。

有「ついに流れが来た！ 彼女から手を離れたまえ！」

つかつかと歩み寄る有。

しかし、ちひろのパンチが東堂を一閃、東堂ノックアウト。同時に、有の頭に降ってきた錦鯉が直撃。二人同時に倒れる。有に気づくちひろ。

ちひろ「あれ？ もし、大丈夫ですか？」

有「うううう。天…地…無用…」

ちひろ「狭間先輩じゃないですか！ 奇遇ですわね！」

有「お…俺の名前を」

ちひろ「覚えてないですか？ サークルで初めてしゃべったの、狭間先輩ですよ？」

有「（拳を見て）それは…おともだちパンチ」

回想、時計台。初めて会った時の彼女のにぎったまるい拳。

ちひろ「おともだちパンチの話、覚えててくれたんですね！」

有「（満面の笑みのまま、気絶）」

ちひろ「先輩？ 先輩！」

○有一の下宿、内

同じ満面の笑みのままぼーっとしている有。有がカップ焼きそばをつくりながらつつこむ。

有「で？」

有「…（ぼーっとしている）」

有「で？」

有「あ、いかにいかに。最近意識が飛ぶ。彼女の真善美の打ち揃った微笑み、この世の至宝」

菲 沢「そこで気絶しちゃあいかなだろ」

有 一「翌朝の京都新聞にも載ったのだが、竜巻が巻き上げたものが、遠いところでおちてくることがあるそうだ。俺の頭に直撃したのは『御泥ヶ池』、時価2万」

菲 沢「彼女は？」

有 一「意識を取り戻した時には先に帰っていた」

菲 沢「(頭を抱え)：だめだこりゃ」

有 一「何を言うか！ 栄えある第一歩を永遠に歴史に刻む記念日ではないか！ 彼女は私の名前を知っていた記念日！」

菲 沢「…」

有 一「いいか、ほとんどの男は勇気がない。

外堀を埋める地道な作業を続ける勇気を持たず、すぐに本丸に突撃しては失敗する。俺は策を練った。外堀を少しずつ埋めてゆく、真に勇気ある作戦に挑む」

菲 沢「なんだそりゃ」

有 一「名付けて、ナカメ作戦」

○京大学生街1 (今出川の餃子「白水」前)

自転車で下り坂を下りてくるちひろ。
と、有 一と出くわす。

ちひろ「あ先輩。奇遇ですね」

有 一「おう」

○京大学生街2 (スーパー大黒屋内)、深夜

ちひろ「先輩！ 奇遇ですね」

有 一「やあ」

○京大学生街3 (銀閣寺湯前)、夜

ちひろ「ビバ！ 風呂」

とほくほくして出てくると、表で有 一がポカ리를飲んでいる。

ちひろ「奇遇ですね！ 先輩」

○京大学生街4（カレー屋「久留味」前）

有 一「週二、三回は偶然の出会いをする我々。彼女はこれを運命の出会いと感じ始め、もうこれは運命の糸でがんじがらめだよキミたち！と誰もが思うほどうけあいに、二人は出会い続けるのだ」

蕪 沢「それが外堀を埋めること？」

イメージ。巨大な外堀にスコップ一杯の砂をぼしょつ。

有 一「ナカメ作戦の意味を教えてやろう。

なるべく彼女の目にとまる、の頭文字だ！」

蕪 沢「…（アホか）」

有 一「むっ！ 彼女の来る時間だ！ 下がっていたまえ！」

隠れさせられる蕪沢。

自転車でシャァッと来るちひろ。

ちひろ「先輩！ 奇遇ですね」

有 一「やあ」

過ぎ去る彼女を見送る有一。

イメージ。外堀に砂がぼしゃつ。

蕪 沢「埋まるのか？ 外堀」

○京大学生街5

よろよろとおばあちゃんがカートを押して通る。関西古紙のトラックが通る。
有 一「（時計を見ながらきよきよ）」

○バー「月面歩行」内、夜

入ってきた樋口。

樋 口「おや」

ちひろ「樋口さん！」

カウンター内のバーテン姿のちひろ。

樋 口「羽貫から聞いてたが、この店とは」
ちひろ「あのオモチロオカシイ夜が忘れられず、バイトはじめてみたのです。（ビール出しながら）羽貫さんは？」

樋 口「不肖ながら、ケンカ中につき」

ちひろ「意外です。愛し愛されてる仲に見う
けられましたか」

樋 口「…愛というのは、所詮輸入した概念
にすぎんよ。神にも隣人にも家族にもある
ラヴが、男女のムフフのみ違う意味になる
のは、日本語訳が間違っておるのだ。16
世紀、苦勞して最初に編み出したラヴの訳
はどうであつたか」

ちひろ「どうでしょう」

樋 口「御大切。愛してるなどと言う輩は所
詮輸入品だ。私の羽貫への気持ちは、御大
切がしつくりくる」

ちひろ「…なんと素敵な話でしょう！ これ
だからバーというものはオモチロし！」

樋 口「そうかね」

ちひろ「お陰さまですっかり夜型の生活に」

○京大学生街4（カレー屋「久留味」前）

きよろきよろして待っている有一。
誰も来ない。

○タイトル「夏」

○京大構内

落ち込む有一。

薺 沢「縁がない。あきらめろ」

有 一「…貴様には、これが見えるまい」

薺 沢「？」

有 一「小さな彼女が私の周りをうろろうし
ている。ある時は微笑み、ある時は踊り、
ある時は決して振り向いてくれぬ後姿。四
六時中私の周りにいる。ホレそこにも」
小さなちひろがダンス中。

薺 沢「…草津の湯でも治らぬ病か」

有 一「日常のちっちゃな出会いなど意味が
ない。ドラマや映画のような運命の出会い
こそが外堀を埋めるのだ。我がロマンチッ

クエンジンをフル回転し、薔薇色のキャンパスライフから逆算してみた。もはやアツアツと言って過言ではない我々は、ある日回想する。あの日あの時あの場所で、あれが運命の出会いであったかと

菲 沢「：同じ本に手を伸ばして手が触れるとか、か」

有 一「！！！！」

菲 沢「（鼻で笑う）」

有 一「貴様エスパーク」

菲 沢「ベタすぎるわ」

有 一、バン！とチラシを出す。

「下鴨古本市」とある。

有 一「京都最大の古本市。彼女が本を愛し、この大海原にひそかに挑むことは調査済みだ。運命の出会いには、今や8月16日に絞られた！」

菲 沢「（あきれる）せいぜい同じ本に手を出す練習でもしておけ」

有 一「練習済みだっ！」

さっ、さっ、さっ、と手を出す有 一。

○寺の前

筆で大書した今月のひと言『うかうか一年』
有 一「わかつとるわっ！」

さっ、と手を伸ばし、手に触れ、さわやかに本を譲る練習。

○下鴨神社の森、古本市入口「テントA

緑深い森の中には、白いテントの古書店の棚と数万冊の古本が、迷路をつくっている。

ざわざわと行き交う好事家、カップル、学生。屋台や瀬戸物市なども。

有 一は気分が悪くなっている。景色がゆがみ、本の顔をした白い人（以下、本ニンゲン）が本の隙間から出てくる。

本ニンゲン1「貴様。俺も読んでない癖に人

生という山に登るのか」

本ニンゲン2「昔の立派な大学生は俺ぐらいは読んだぞ」

本ニンゲン3「お前の本棚など全てクズだ。

どの本もお前の欲する答えなど教えてくれぬではないか。俺を読め。俺こそ貴様の探し続ける天与の一冊」

本ニンゲン4「否、俺だ」

本ニンゲン5「俺だ」

有 一「おええええええ」

と木によりかかり吐く。

有 一「何故古本はこうも俺を苦しめる」

○同、テントB

すうと息を吸い、むんと胸を張るちひろ。いざ古本の大海へ。

本ニンゲン6「こっちの本はオモチロイよ」

本ニンゲン7「こっちの本は甘いよ」

数々の本の誘惑にまごまごし、とある

テントの古本『鳥とけものと親類た

ち』を見つけるちひろ。

ちひろ「ジェラルド・ダレルの続編！ よう

やくあなたに会える時が！」

裏返すと100円の値札。小躍り。

ちひろ「ビバ・ビギナーズラック！」

祝福の拍手をする本ニンゲンたち。

ぺこりと一札するちひろ。

○同、テントA

有 一「あれは！！」

遠方にちひろの後姿。人ごみをかき分け後を追う。

が、少年(10)とぶつかる。その拍子に彼のソフトクリームが地面に。

少年「あー！ー！ー！」

有 一「(無視して先を急ぐが)」

少年「あー！ー！ー！」

有 一「…(無視できないが行こうと)」

少年「(大声を出そうと息を吸う)」
有「わかった。弁償する」

○同、ソフトクリーム屋台くテントC

二つ買い、おそろいのソフトクリーム。

有「(きよろきよろ)」

少年「さっきのお姉ちゃんを探してる」

有「!!!:何故分かる」

少年「バカでもわかる。目から赤いビームが出てた。あの人の後頭部が焼け焦げて脳味噌飛び散るぐらいに。人違いだったら殺人犯だぜ」

有「馬鹿な。彼女の後姿の世界的権威の俺が見まがう訳がない。俺は60億の後姿から彼女を探すことが出来る」

少年「:ストーカー?」

有「ちがうわボケ! :と全力で否定したいところだが:」

と、少年は古本の棚の本を、勝手に出したり入れたりしている。

有「何をしている?」

値札を付け替えたりもしている。

有「イタズラはやめなさい」

少年「この店主は無知に過ぎる。中身も読まず人の意見で値札をつけている」

有「:?:」

少年「あるべき本を、あるべき場所へ。僕は古本市の神様だ」

○同、テントC前

羽貫「ようちひろ! ひさしぶり!」

ちひろ「羽貫さん! 樋口さんも!」

羽貫、樋口。樋口は重厚なロレンス・ダレル『アレクサンドリア四重奏』を手下げに。

ちひろ「樋口さんの筋金入りの鞆晦は、かくの如き教養に裏打ちされているのですね!」

樋 口「ん？ これは人に頼まれただけだ。本など一文の得にもならぬ。紙にインクが印刷されているだけではないか。（向うを指し）焼きそばでもおごろう」

○同、焼きそば屋台前

三人は座って焼きそばとビール。

羽 貫「アンタの奢りなんて雪がふる」

樋 口「デカイ儲け話がある。李白氏の催しだね」

ちひろ「李白さん！ お会いしたいです！」

樋 口「今日はいにく会員制なのだ。また紹介するよ。（羽貫に）あとで」

一気に焼きそばを食い、席を立つ。

ちひろ「…仲直りしたんですね」

羽 貫「すぐ忘れるからあいつ」

遠くで手を振る樋口。

羽 貫「（手を振る）あいつのイメージナリー本棚には、一冊の本もないよ」

ちひろ「イメージナリー本棚？」

羽 貫「あいつが言いだしたんだ。今まで読んできた本が全部順番に並んでいる本棚があったとしたら、面白くない？ って話」

イメージ。ちひろの名前の書いてある本棚。現在から過去にさかのぼり、

次々に本が埋まってゆく。『ドリア

ン・グレイの肖像』『風と共に去り

ぬ』『細雪』『なまみこ物語』…

ちひろ「なんと素敵な本棚！」

イメージ。一番下をのぞきこむちひろ。

小学校の教科書、幼稚園のお遊戯本、

白い小さな絵本。幼いちひろ（4）が

絵本をつかんで走ってゆき、縁側へ。

外は雨。寝転がって、じっと白い絵本を見る幼き日のちひろ。

ちひろ「『ラ・タ・タ・タム』！」

羽 貫「？」

ちひろ「どうして今まで忘れていたんでしょう！（立ち）羽貫さん、古本市って絵本

も売ってますよね？」

羽貫「家はないの？」

ちひろ「私のへっぽこ野郎！ですよ。どこかへ失くしてしまったのです。思えば、オモチロさを求める私の人生は、あの絵本との出会いからはじまった、というのに！」

それを隣の棚の本を入れ替えながら聞いていた少年。

○同、テントD

きよろきよろしながら歩く有一。

少年「いたよお姉ちゃん」

有一「どこに！？」

少年「それよりさ、彼女の探してる本が分かった」

有一「？」

少年「『ラ・タ・タ・タム』。75年初版の白い絵本」

有一「絵本。：（想像してうっとり）彼女らしい」

少年「おおかた同じ本に手を出して恋がはじまるとか思ってたんだろ」

有一「こ、子供の癖に生意気なことを！」

古本の棚のそれぞれを指差して、

有一「『シャーロックホームズ全集』は読んだか？『アドリア海の復讐』や『モンテ・クリスト伯』は？本を読まずして大人になれんぞ！『岩窟王』『戦中派闇市日記』『鬼火』！『アンドロギュノスのちすじ』はどうだ！」

少年「読んでるよ」

有一「なにっ」

少年「兄さん知ってるかい？全ての本は、

錯綜する因果の糸でつながっている。

『ホームズ』を書いたコナン・ドイルは

『失われた世界』を書いたが、それはフランスのジュール・ヴェルヌのSFの影響を受けたからだ。そのヴェルヌが『アドリア海の復讐』を書いたのは、アレクサンドリ

ア・デュマを尊敬してたからだ」

『ホームズ全集』を棚からつまみあげると、金色の糸につながった『失われた世界』が棚から引っ張り出されてくる。それにも金色の糸があり、『アドリア海の復讐』が宙に浮く。

少年「デュマの『モンテ・クリスト伯』を日本で翻案して『岩窟王』としたのが『萬朝報』主宰の黒岩涙香。彼は『明治バベルの塔』という小説に作中人物として出てくる。その作者山田風太郎が『戦中派闇市日記』で愚作と切って捨てたのが横溝正史の『鬼火』。彼は『新青年』の編集長だったが『アンドロギュノスのちすじ』の渡辺温と組み……」

次々に出てくる本達は空中に浮かび、千冊の本の天空の城を形成する。

少年「古本はただの紙じゃない。人から人の手に渡り続ける、すべての記憶だ」
有 一「……」

○同、テントE

ちひろ「ないですねえ」

羽 貫「(紙コップが空)ガソリン追加あ」

ちひろ「なむなむっ！」

羽 貫「？」

ちひろ「これは私が幼少のみぎりに開発した、万能のお祈りなのです」

羽 貫「見つかるといいねえなむなむっ！」

ちひろ「なむなむっ！」

○同、テントF

値札をつけかえている少年を、店主が見つける。

店主「コラ坊主、なに悪さしとんのや！」

少年「(嘘泣き)ちがうよう。このお兄ちゃんに命令されたんだよう」

有 一「ん？」

少年「やらないとアレをするぞって」

店主「(有一に) あんた子供になにを。事の次第によっては警察を…」

と、東堂が助け舟を。

東堂「その青年はワシの知り合いだ。その子供、さつきも別の所でトラブルを起こしていた」

店主「あ、東堂さんの知り合いなら…あ」

少年は舌を出しさつさと逃げる。

東堂「木屋町以来だな青年。…ズボンはいとるな」

有「東堂さん。その節は」

東堂「そうだ、アンタも参加者になつてくれんか。二度も助けてやった縁だ。バイト料10万出す」

○同、会場外れの怪しげなテント

陰気な老学者(80)、学生服の京福(20)、樋口が待っている。

老学者「地獄の李白の名を聞いて、欠員が出たと聞いたが」

東堂「補充した」

暗い本棚でつくった廊下を進む一行。

東堂「(有一に耳打ち) これから李白ジジイの出す勝負に勝った者は、借金のカタに奪った膨大な古本コレクションから一冊与えられる。所望を聞かれたら、北斎の鉄棒ぬらぬらと言うのだ。勿論、滅多に出ることはない春画」

重々しい扉をあけると…

○李白の間

ダルマストーブがガンガンたかれ、天井から裸コタツが下がっている。

李白は氷の椅子に水着で座り、タライの水に足をつけ、スイカとビール。

中央にはコタツ、その上には真っ赤な煮える火鍋が最上の熱気を放つ。

李白「ようこそ。お茶目な李白の真夏の祭典へ」

置いてある綿入りのドテラに袖を通し、中央のコタツに入る5名。既に脂汗。黒い巨大本棚が出現。曇りガラスで身は不明。

李白「さあ、所望せよジェントルメン」
老学者「『古今和歌』、藤原京極中納言の直筆写本！」

京福「東京庚寅新誌社『汽車汽船旅行案内』、明治15年版！」

樋口「岸田劉生が岡崎で紛失した日記帳が出たってね」

東堂「北斎の鉄棒ぬらぬら！」

有「お、同じく」

李白、食べるよううながす。

全員、一口食べて、口から火を吐く。

モーレッツに辛い。

有「（東堂に）か、帰っていいですか」

東堂「まだブツを確認しとらん！」

李白「最後までワシを楽しませる猛者は誰かの」

本棚の曇りガラスオープン。

京福「うおっ！」

京福に続き、老学者、東堂、樋口が本棚まで走り、目当ての本を確認。

有「ん？」

本棚に、光り輝くように一冊の絵本。

有「NA「私はずっと、天与の一冊を探していた。何か知らないことがあるから我が人生は不遇なのか。その何かを知るたった一冊の本が、暗闇の私を解放する雷（いかずち）になるのではないかと」

走ってそれを手に取る有「。その絵本は、『ラ・タ・タ・タム』。

有「（李白に）この本を」

東堂「（小声で）オイ話が違う！」

その本を裏返すと、子供の字で「くろきちひろ」と書いてある。

有「NA「幼き日に彼女が書いた自分の名前。」

手あか。こぼした水。こすれ。私は人生で
はじめて、本を知識ではなく肉体の一部だ
と感じた」

有 一「この本を所望します」

東 堂「裏切り者！ 裏切り者！」

有 一 N A「諸君、異論があるか。あればことごとく却下だ」

断固たる決意の有 一。

○古本市、木陰の休憩所、雨

にわか雨がふってくる。慌ててビニールをかける店主たち。

○李白の間

猛烈な湯気の中、すさまじい形相で火鍋を食らう5人。汗とよだれと鼻水が飛び散り、全身汗まみれの阿鼻叫喚。倒れる東堂。笑う李白。ばたばたと倒れる老学者、京福。
余裕の樋口。吼える有 一。残り二人。

○古本市、木陰の休憩所、雨、晴

ちひろと羽貫がラムネを飲みながら、にわか雨の雨宿り中。

ちひろ「樋口さんと仲直り出来て良かったです
すね」

羽 貫「もはや腐れ縁だからねあいつとは。」

ちひろは、彼氏は？」

ちひろ「（恐れ多く首を振る）そんな紳士淑女の仮面舞踏会の如き高度なかけひき」

間に挟まれる樋口と有 一の一騎打ち。

ちひろ「：わたしは、自分がオモチロくないのが嫌なのです」

羽 貫「？」

ちひろ「自らオモチロさを求め、『京都を歩く会』に入ったのはいいのですが、私の話
はいつも最後まで聞かれないのです。きつ

と私と話すなら炊飯器と話す方がましなのです。私が出会ったオモチロキ人を東大路に順番に並べれば、樋口さんは間違いなく最北端に位置します」

羽 貫「樋口はあげないよ？」

ちひろ「そういう話じゃないです」

羽 貫「(笑) つかあんたの事をまるごとなんでも愛してくれる男が現れる。そしてらあんたも変わるよ。どこまでだって歩いてくれるさ」

ちひろ「…」

羽 貫「あいつと歩いてない路地はない」

ちひろ「…」

雨がやむ。羽貫立つ。

雲間から光が射す、雨上がりの古本市。

ちひろ「雨上がりは、景色が立体的に見えるすね。なむなむ」

○李白の間

大量の汗と鼻水を流したまま、笑顔で倒れる樋口。ぴくりとも動かない。

有 一「ヒ―：ヒ―：唇がはれている。」

李 白「天晴！ 所望の本を与える」

有 一「ヒ―：ヒ―：(声が枯れている)」

扉がひらき、突風がへやを何周も。

有 一「ヒ―？」

七色の吹き流しが飛び、色々なものを飛ばして竜巻をつくる。電源落ちる。

電気回復。古本の棚からすつかり本が消えている。13冊のクズ本のみ。

李 白「わしのコレクションが！！」

それぞれの頭文字をつなげると：

李 白「あ、る、べ、き、…あるべき本を、あるべき場所へ？」

○古本市、テントE

全身汗まみれで幽鬼のようにさまよう

有一。少年がいる。

少年「古本という海を人が泳ぐのか。人という海を古本が泳ぐのか。兄さん意外に根性あるね」

人ごみに消える少年。

○同、絵本コーナー

有一「○△※□！！（声が出ない）」

『ラ・タ・タ・タム』を柵に発見する。走る。走る。汗まみれで走る。

汗でヌルヌルの手を伸ばす。

と、同じ本にのぼす手がもうひとつ。

ちひろ「先輩！」

有一「○△※□！！」

ちひろ「奇遇ですね！」

汗まみれの己の醜い姿に気づく。オタオタしながらも、汚い笑顔で絵本を譲る。

ちひろ「探していた本なのです！ はちきれんばかりの紳士の行為！！」

頭を下げるちひろ。上げると有一の姿はそこにはない。

何気なく裏表紙を見て、さらに驚く。

ちひろ「なむなむっ！」

○NF事務局、内

燃えつきて、廃人のように転がっている有一。事務局内はNF（学園祭

November Festival）実行委員会の人

たちが働いている。

菫沢が書類をもって帰ってくる。

菫沢「なんだまだいたのか」

有一「…（転がったまま）」

菫沢「（仕事をしながら）思い描いた通りの運命の出会いだったんだろ？ 何を文句があるんだ」

有一「上京区と左京区を合わせた範囲の辛さを煮込んだかの如き殺人鍋をくらったの

だ。喉をやられフゴ―って言いながら、生まれたての怪物のような体液まみれで彼女に触れてしまった。大失態だ」

葦 沢 「用がないなら帰ってくれんか。俺にとつて最後のNF事務局なんだ。学生生活の総決算なんだよ」

有 一 「俺よ。恥を知れ。しかるのち死ね」

葦 沢 「…（無視して書類に赤入れを）」

有 一 「俺は何もないまま、もう総決算か」

葦 沢 「うるさいなあ。だったらそれ以上の奇跡を起こせばいいだろう自分の手で！」

有 一 「…」

○ちひろの部屋

一人絵本を静かに読み終えたちひろ。

ちひろ 「…」

○バー「月面歩行」内

羽貫と樋口が飲んでいる。

ちひろはカウンターの途中で絵本を読む。

羽 貫 「よっぽどその本気に入ったんだね」

ちひろ 「奇跡ですよ。（裏表紙を見せ）ひよこ豆のごとき小さき時分に失くした本に、

あの古本市で再会できたのです。なんたる偶然」

樋 口 「その本を取り戻した勇者が一人いる。偶然ではないよ」

ちひろ 「？」

樋 口 「李白翁の催しがあるといったろ。そこで私を打ち負かした果敢なる闘士が、その本を賞品にもぎ取った」

ちひろ 「そんな方が」

羽 貫 「アンタが勝負事に負けるとは珍しい」

樋 口 「なんと言ったかな。貴君のクラブの先輩だよ。偽電気ブランの飲み比べの時、鯉に頭を打たれた男」

ちひろ 「狭間先輩！」

樋 口「それ」

ちひろ「古本コーナーから、私に譲ってくれた真の紳士なのです。名も告げず去ってゆくヒーローのように風のように消えて…。先輩と私は、週に一、二度偶然に会う仲間なのです。お礼を言わねば！」

○学生街1

きよろきよろするちひろ。

○学生街2

しばらく待つちひろ。
関西古紙のトラックが通る。

○学生街3、銀閣寺湯前、夜

女湯から期待して出てくるちひろ。
誰も待ってなどいない。
ちひろ「…」

○テレビニュース

大文字山の「大」の字が、「大スキ」
になっている。
ニュース「今朝の映像です。大文字山に点を
足して犬文字山や太文字山にしてしまえと
いうのは、京都の馬鹿学生なら誰もが考
える妄想ですが、大スキ文字山にする不逞
輩が出現しました。事態を重く見た川端警
察は…」

○NF事務局前、各サークル立て看板製作場

葦 沢「まさかお前か」
有 一「ちひろ、の分の角材が足りなかつ
た」

葦 沢「方向性を間違えていないか」
有 一「先日は第二の土下座像となり、彼女

と目が合う計画だったが遂に彼女は通りからず……」

○三条京阪、彦九郎先生（通称土下座）像前

青銅色に塗ってコスプレした有一が、御所に向かって土下座する像の隣で土下座している。無視する人々。

○（元に戻り）NF事務局前

蕙 沢「全力で目標から遠ざかっている気がする」

有 一「……蕙沢よ。俺は彼女など本当は好きではないのではないか？」

蕙 沢「は？」

有 一「大学生ともなれば彼女くらいいるものだ、という世間の無邪気が大学生達を強迫し、結果誰も彼もがカップルになるという怪現象が起きている。俺は彼女とカップルになりたいのか？ おっぱいを揉み揉みしたいのか？ ゴム鞠でも揉んでおれという話だ。純粹理性により、神聖なる彼女と汚い俺の間の論理的関係を考えよ。空集合である。好きとは何だ？ 俺が外堀を埋めてゆくなどただの迷惑だ」

蕙 沢「……」

有 一「本に埋もれ魂を練り、天下国家の行く末を思う人生に戻る。……俺は、彼女をあきらめる」

○百万遍交差点

NF前の立て看板でぎっしりの交差点。南から自転車で来る有一。

東から自転車で来るちひろ。

二人の間を、NF公演の巨大な立て看板を運ぶ人達がさえぎる。

看板を挟んで止まる有一とちひろ。

通行を止めたことに気づいた運ぶ人た

ちが、立て看板を90度回す。
二人は（自分から見ても）看板の左側を
通るので、看板越しの互いの存在に気
づかない。

○別の日、西部大階段前、昼／夜

自転車のパンクに気づき、止まる有一。
鍵をかけ、バスに乗って去る。
止められた有一の自転車に、通りがか
ったちひろが気づく。
夜まで待つちひろ。
バスに乗った有一が、その前を通り過
ぎてゆく。二人は互いに気づかない。

○有一の部屋、夜

万年床で本を読む有一。壁を見つめる。

○ちひろの部屋、夜

『ラ・タ・タ・タム』を胸に抱きしめ
るちひろ。小さく一度、大きく一度、
おともだちパンチをくらわせる。

○タイトル「秋」

○寺の前

今月のひと言『縁は奇なもの味なもの』
有 一「…会わなければ、縁などない」

○京大園祭（以下NF）の風景

様々な企画の星の数ほどの立て看板
（演劇祭、模擬裁判、マジック、落研
など）。山ほどの模擬店、各所で演奏
するバンド、メインステージのダンス。
露店や客引きだらけの大通り。

○同、吉田グラウンド内、NF事務局テント

焼きそば二人分持ってきた有一。

葦 沢「サンキュー！ 助かった」

学内の地図。無線機が色々鳴り、事務員たちがあわただしく働く。

有 一「やはり学園祭など阿呆の祭典だ。庭の石を持ち上げると、じめじめした裏に大量の虫がいて逃げ惑うだろう。普段は隠れて湿った虫たちが、ここぞとばかりに己が情熱を無理強いしてくる。中途半端な出来の、中途半端な才能で。俺自身を見るようでかなわん」

葦 沢「たまには外に出るのも気分転換になるだろ」

有 一「ふん。しかし学園祭実行委員長とは、出世したな」

葦 沢「雑用係の王様だよ。当局から学生の自治を守る盾、と言えば格好はつくが」

有 一「(地図の印をさし)それは？」
葦 沢「ああ。初日から事件だらけだ。エチルアルコール研の七色のゲロでトイレが詰まり、小さい達磨が各所に出没。文学部古本市では値札が何者かに貼りかえられ、怪しげな宗教団体が手かざしを。とりわけ、韋駄天コタツと偏屈王が面倒の双璧だな」

コタツマークと偏屈マークを指す。
有 一「韋駄天コタツ？」

葦 沢「神出鬼没に移動するコタツが、無差別に鍋をふるまう。許可なしのゲリラだ。あとこれまたどこで演じられるか分からぬゲリラ演劇『偏屈王』。5分ほどだけ演じられては幻のように消える。相当面白いらしく、観客が殺到、将棋倒しのおそれが」

突然、立ち上がる有一。

葦 沢「なんだ？」

有 一「俺は、60億の後姿から彼女を見つけてることが出来る」

ぼてぼてと歩くちひろの後姿。

葦 沢「オイオイ。あきらめたんだろ？」

有 一「肉欲を削ぎ、俺は純粹理性となった。
だが、人には残された部分がある」

自分の左胸を指差す有一。

菲 沢「(笑) 詭弁はどこにでもつくな」

有 一「ランチは中止だ。せいぜい頑張れ」
と歩き出す有一。

菲 沢「(笑う)：せいぜい頑張れ」

無線機1「『偏屈王』の主演女優をおまつり
広場においつめました！」

無線機2「了解！ アルファとチャーリー包
囲せよ！」

○同、吉田グラウンド(おまつり広場)

追う有一、逃げてくる赤いドレスの女
優にぶつかる。取り押さえる事務局長
たち。

女 優「私ごときをつかまえても、お客のい
る限り『偏屈王』は続くのよ！」

騒ぎのどさくさでちひろを見失う有一。
とにかく歩き出す。

○同、吉田構内T字路

羽 貫「(ケータイ片手に) こっちこっち」

二畳の上にコタツ。豆乳鍋で酒盛りす
る羽貫、樋口。原稿をひたすら書いて
いるパンツ総番長。

ちひろ「(ケータイを切り) この喧噪の中、
青空コタツとはなんと怪しい！」

樋 口「おいおい褒め言葉はよせ」

鍋を一口食べるちひろ。背中に巨大な
緋鯉のぬいぐるみを背負っている。

羽 貫「なんだそりゃ？」

ちひろ「幸先のよいことに、射的でもらった
のです」

回想。アーチェリー部の射的屋台で一
等の巨大緋鯉をもらうちひろ。

ちひろ「お化け屋敷ではコンニャクにおとも
だちパンチをおみまいし、詭弁討論会では、

パン連合に一票を投じて参りました」

回想。お化け屋敷、詭弁討論会。

ちひろ「：そちらの方は」

黙々と原稿を書くパンツ総番長。

樋口「紹介しよう。パンツ総番長だ。この

一年間、一度もパンツをはき替えていない、

漢の中の漢」

ちひろ「はあ。：えっ」

パンツ総番長「大丈夫。私はコタツに入って

いませんから」

原稿を書き終え、小さな達磨に収める。

パンツ総番長「よし。次へ移動だ」

樋口、畳の下のキャスターを出す。

樋口「このコタツは学内中を移動する、さ

まよえるコタツなのだ」

羽貫「うろろうろしてきなよ。ナントカ先輩

に会えるかもよ」

ちひろ「ハイ！：そんな気がします！」

○同、映画サークル「みそぎ」上映会場

ポスター『鼻毛が1メートルのびた男』

観客がアホらしさにあきれる中、

ハンカチを手に涙しているちひろ。

○同、閨房調査団青年部「萬国桃色秘宝館」

入り口前でちひろを止める青年部。

青年部1「君のような人が来る所じゃない」

青年部2「女人禁制です！」

○同、展示「象の尻」

壁に埋め込まれたかのような、巨大な象の尻。

ちひろ「かわいい。まるで隣の教室の象が、

頭隠して尻隠さずになってるみたい」

と象をなでると、チクチクして痛い。

ちひろ「いたっ！」

受付の人、須田（20）「びっくりしまし

た？ 象の尻って、意外な剛毛なんです」
ちひろ「現実とは、かくも厳しきものなので
すね」

と何度も手のひらに感触を覚えさせる。

○同、お化け屋敷、詭弁討論会、秘宝館

次々に聞き込みをする有一。

お化け屋敷の人「可憐な子だった」

詭弁論部の人「凜としていて」

秘宝館の人「触れてはならぬ陶器のような
みそぎの人」泣いてくれた。いい子だった」

有一「お前らなど彼女のアウトオブ眼中
だ！ だがチクショウ、きつと俺もその一
人ではないか！」

○同、時計台、大楠の下

樋 口「おうい」

韋駄天コタツの三人が、有一に声を。

有一「韋駄天コタツとは樋口さんでした
か！ 怪しい者の陰に樋口さんありだ」

樋 口「おいおい世辞はよせ。（鍋をさし）

あのときほど辛くないぞ」

コタツに入り乾杯する有一。

樋 口「彼はパンツ総番長だ。この一年パン
ツをはき替えていない剛の中の剛の者」

有一「なにゆえそんなことを」

樋 口「これが泣かせる話でねえ」

パンツ総番長「一年前の学園祭で、突然、林
檜の雨が降ったのです」

○同、吉田構内、メインストリートの露店

りんご飴をなめながら、ちひろは古着
と巨大V3を見ている。

須 田「先ほどはどうも」

ちひろ「ああ！ 象の尻の方」

須 田「あんなに熱心に見てくれた方ははじ
めて」

ちひろ「どうしてあんなに奇天烈な展示を思いついたんですか？」

須田「それがね、恋の話なんです」

ちひろ「恋？」

須田「一年前の学園祭でね、林檎の雨が降ってきたの」

○回想、一年前の学園祭、法経館中庭

舞台の下地が組んである。パンツ総番長、腰を下ろして休憩。反対側の端に先客の須田。

と、中庭に林檎の雨が降り注ぐ。3Fの教授が林檎の箱をひっくり返した。二人の頭の上に同時に林檎が落ちて、ぽうんと跳ねる。思わず爆笑する二人。

○（元に戻り）時計台前、韋駄天コタツ

パンツ総番長「一目ぼれだ。あの時連絡先を聞いておくんだった。そこで吉田神社に願をかけたのだ。彼女に再会するまで、決してパンツをはき替えぬと」

羽貫「180度努力のベクトルが違うよ。全力で目標から遠ざかってる。（有一を見て）えええ？」

有一は感動している。

有一「（総番長の手をガシッと握り）あなたは私と同じニオイがする」

羽貫「あんたもパンツ替えてないの！」

有一「違う！ 愛する人の為の地道な努力、分かります」

パンツ総番長「分かるか」

有一「分かるとも！ 飲もう！ 否！ 私は今愛するその人を探している最中なのだ！ いずれ飲もう！」

立ち上がり、走り去る有一。

○同、露店前くT字路

須 田「彼と話した中で唯一覚えているのが象の尻の話で。だからもう一度学園祭に来た彼が、私だと気づかないかと思って」
ちひろ「恋心のこもったお尻だったのですね！」

須 田「でももう解体しないと」
ちひろ「どうして？」

須 田「4日間展示したけど、祭りももう終わりだから」
ちひろ「…」

と、黒づくめの集団が四方から集まってきた、放置された小さな達磨から台本を出し、簡易舞台をつくりはじめる。
鉦を鳴らす劇団員の小久保。

小久保「『偏屈王』47幕！ 間もなく開演！」

鉦を聞いて人々が集まってくる。

劇団員1「広田が事務局に捕まったらしい」

劇団員2「主演女優は痛い」

小久保「ショウマストゴオン！（ちひろと目が合う）あなた、お芝居の経験は？」

ちひろ「小学生の頃、ワカメの役を」

小久保「素質あるわ！ 台本見ながらいいからプリンセスダルマ役を！ ここで会ったのも何かのご縁！」

ちひろ「はい？」

小久保「中止する訳にはいかないの！ 学園祭中のお客が見てるのよこの芝居！」

ちひろ「学園祭中の人が…ですか」

台本を受け取るちひろ。

×

×

×

黒山の人だかり。鉦を鳴らす小久保。

小久保「『偏屈王』47幕！ 敵は映画サー

クル『みそぎ』！」

プリンセスダルマ（ちひろ）「追いつめたぞ！ 『みそぎ』の相沢！ 我が愛しの偏屈王さまを暗き牢獄より解放せよ！」

相 沢「ワハハ。プリンセスダルマよ！ それは不可能と言うものだ！」

ダルマ「鼻毛が1メートルも伸びるか！ 下

らぬ映画ばかりつくりやがって！（客笑う）昨日の夜、皆が帰った後、こっそり大スクリーンで桃色ビデオを鑑賞したであらう！」

どっと沸く観客。

相 沢「な…何故それを！？」

ダルマ「恥ずかしいそのタイトルは！」

相 沢「は、白状します！ 偏屈王は既に詭弁論部の魔の手に！」

ダルマ「ならば貴様には用はない！ ダルマスペシャル47！」

グリーンピースを鼻につめる。

相 沢「ぐあああああ（と倒れ退場）」

ダルマ「偏屈王さま！ …！」

急に宙を見つめ、無言になるちひろ。

観 客「？」

ダルマ「（ぼろぼろと涙が）会いたい…のまれる観客。静かに広がる拍手。

鉦を鳴らす小久保。

小久保「今回は30分後、いずこかで！」

× × ×

小久保「（ちひろにメモを）次はここ。あなた、才能あるわよ」

撤収し、四方八方に散る劇団員。

拍手する、カメラでこれを撮影していた本物の相沢（21）。

相 沢「さつき『鼻毛の男』の映画を見てくれてた子だね。いい芝居だった」

ちひろ「映画サークルの方ですか！」

相 沢「ネタにされた相沢本人だ。聞いてないよしかし。いま『偏屈王』総集編を撮ってるんだ。今のは名場面になるよ」と去る。

須 田「（拍手して）すごいよかったわ！

恋する女の気持ちだが、痛いほど伝わって来て…すごい演技でした」

ちひろ「演技じゃなくて、勝手に涙が出てきちゃって。…いるんです。私にも、もう一度会いたい人が」

○同、吉田構内、E号館前

ミステリ研の「偏屈王解体新書・40
幕まで全敵サークルリスト完全解析」
を眺めている有一。

新聞部「号外号外！ 偏屈王、三度目のヒロ
イン交代！」

ビラを受け取った有一はびっくり。

有 一「どういう経緯で彼女が！」

ちひろの写真が大々的に。

その下の文字を見て更に驚く。

ビラの文字『春の木屋町からはじまった「偏
屈王」は…』

○同、吉田グラウンド内、NF事務局テント

複数ある地図にキレている蕪沢。

蕪 沢「おいどうして地図が何枚もあるん

だ！ 情報が錯綜するだろ！」

事務員「すいません、対応に追われるうち」

一枚に重ねて驚く蕪沢。

蕪 沢「…なんで気づかなかったんだ！」

コタツマークと偏マークが重なり合う。

蕪 沢「韋駄天コタツと偏屈王は同一犯
か！」

○同、本部構内、文学部控室前

韋駄天コタツに現れる有一。

有 一「あなたが偏屈王でしたか、パンツ総
番長」

パンツ総番長「どうして分かった？」

有 一「(ビラを見せ) 木屋町での第一幕、

俺はパンツ一丁であの場にいた」

パンツ総番長「ああ！ あの時の裸の同志！

君だったか！」

有 一「なぜか俺の知人がヒロインに」

パンツ総番長「ああ。もう何人も事務局に捕
まって、都合が変わっても芝居は続してい
る。最終幕までやり通す」

有 一「そこに行けばヒロインも来るのか」
パンツ総番長「この学園祭のどこか、以上は
まだ言えんがな」

書き終えた台本をそろえる総番長。

台 本『固く抱き合う二人』

有 一「ハッピーエンドか」

パンツ総番長「ハッピーエンドだ。誰もが赤
面することうけあいだ」

有 一「偏屈王は誰が」

パンツ総番長「この芝居を企画したのは、林
檜の雨の女性が、評判を聞いてやって来な
いかと思ったからだ。俺がやらずに誰が」

有 一「…」

パンツ総番長「？」

有 一「そこに、ヒロインは来るんだな」

○空撮、京大学園祭を一周するカメラ

○学園祭、時計台前、夕

鉦が鳴り、偏屈王の舞台。黒山の人。

小久保「『偏屈王』48幕！ 敵は邪智奸佞
の鰻ども、詭弁論部！」

ダルマ（ちひろ）「そこまでだ詭弁論部！

貴様らの言い分はまどろっこしい！」

高坂役「なにおうプリンセスダルマ！ ごは
ん派でもパン派でも論破してくれる！」

そこへ割って入ったNF事務局と蕪沢。

蕪 沢「そこまでだ偏屈王の面々！」

高坂役「ん？」

ダルマ「え？」

蕪 沢「責任者はどこか！ 場合によっては
逮捕も辞さぬ！」

観 客「え？ これ劇？」

プリンセスダルマをとらえる事務局員
たち。ちりぢりに逃げる劇団員。

小久保「偏屈王は続きます！ 最終幕は約束
の場所、開演は6時！」

○同、吉田グラウンド内、事務局テント、夕

ちひろにお茶とお汁粉を出す蕪沢。

蕪 沢 「まあ落ち着いてよ。責任者に会いた
いだけなんだ」

ちひろ 「…(手をつけない)」

模擬店の人 「最終サービス50円でーす」

模擬店の撤収がはじまっている。

蕪 沢 「この祭りもそろそろ終わりだね。ほ
ら、キャンプファイヤーで全てを燃やす準
備が…」

突如、めりめりとテントが倒壊。

巨大な象の尻が乱入してくる。

剛毛のちくちくが蕪沢に直撃。

蕪 沢 「痛い痛い痛い！」

ちひろ 「象の尻の方！」

須 田 「逃げましょう！ プリンセスダルマ
だけは、偏屈王と再会するの！」

ちひろ 「はい。…はい！」

逃げる須田、ちひろ。追う蕪沢たち。

○同、吉田構内、メインストリート、夕

有 一 「はっ！」

その逃走劇を目撃。

ちひろ 「助けてください！」

撤収中の人達 「あ！ プリンセスダルマ！」

撤収中の人達 「なに？ これ劇？」

撤収中のお化け屋敷の人々、コンニャ
クを投げて事務局員達を妨害。

撤収中の閨房調査団青年部、エロ本を
まき事務局員達を釣る。

逃げるちひろ、須田。追うは蕪沢。

さらにそれを追う有 一。

○同、吉田構内、校舎の影、夕

須田、ちひろの背中から緋鯉を外し、
自分の背中に。

須 田 「私が身代わりになる。正門抜けたら
二手に！」

うなづくちひろ。走り出す二人。

○同、吉田正門く東一条く本部正門、夕

須田は右手へ、ちひろは左手へ。

葦沢、一瞬迷う。有一が追いつく。

有 一「アレ？ 舞妓さんで生で見ると意外と…（と向うを見て）」

葦 沢「え？」

その隙に、有一は葦沢のベルトを外してズボンを下ろし、膝かっくん。

転がる葦沢。有一、走り去る。

葦 沢「はあ！？」

有 一「すまぬ友よ！」

○同、本部構内、8号館前、夕

向いの6号館に綱を渡して、綱渡りしている男が観客を集めている。

8号館に逃げ込む緋鯉の須田。追う有一。ズボンを上げながら追ってきた葦

沢、綱渡りを見て、

葦 沢「事務局は何をやっとるんだ！ 観客の安全を確保しろ！」

○同、8号館屋上、夕闇せまる時刻

走ってきた須田、有一。

屋上には韋駄天コタツ。樋口は大量の花火を準備中。羽貫は小さな達磨をお手玉中。

樋 口「おや。特等席へようこそ」

須田の肩をつかむ有一。

有 一「偽物だな。彼女はどこだ」

須 田「よくわかったわね。一等賞にこれあげる」

と緋鯉を有一の首にかける。そこへ葦沢がおいつく。

葦 沢「韋駄天コタツの主！ 貴様が偏屈王

首謀者だな！ 移動式コタツで脚本を書き、

達磨に忍ばせて芝居を操作していたか！」
樋口「私は主だが首謀者ではない。ほれ」
と指差した先は後ろの6号館屋上。

葦沢「なに！」

6号館屋上には、廃材や資材でつくった不気味な城が煙を吐いている。スクリーンに「偏屈王ダイジェスト」のビデオが流れ、「最終幕・風雲偏屈城」のあおりが流れている。照明の準備が進められ、その中で指示を出す鎧の衣装の偏屈王、パンツ総番長。

葦沢「屋上で芝居とはなんと面白そう……いや、危険な！」

○同、時計台前、大楠、夕闇せまる

走るちひろ。ぐるぐる大楠のまわりを周って、どこへいくべきかわからない。ちひろ「偏屈王さま、いずこ？」
目をつぶり、図書館方向へ走り出す。

○同、8号館屋上、夕闇せまる

有「はっ」

葦沢「何だ？」

有「「おおい！ プリンセスダルマ！ 最終幕はこっちだ！」

葦沢「なんのこと！？」

屋上から見た学園祭。人々が黒い米粒のよう。その中のたったひとつの影。

有「「俺は、60億の後姿から彼女を探すことができる」

たったひとつの、ちひろの後姿。

有「「はコタツ脇のロケット花火を取り、火をつける。屋上ぎりぎりまで走る。」

有「「君のいるべき場所はこっちだ！ ちひろ！！」

ロケット花火が音を立てて夕闇を切り裂く。その音に振り向くちひろ。

有「「！！」

勢い余った有一は、足を踏み外す。
立ち上がる樋口、羽貫。遠ざかる屋上、
葦沢、須田。傾いてゆく景色。こちら
に走り出したちひろ。

屋上からまっさかさまに落ちた有一。
ガクンと、突き出た5階の物干しざお
に緋鯉のヒモが引っかかる！

葦 沢 「狭間！（手を出してつかもうと）」
パンツ総番長、スタツフから照明を奪
い、有一を照らす。

パンツ総番長 「下にうつれ！」

照明を動かす。下に綱渡り男の綱があ
る。振り向いた綱渡り男、事態を把握。
有一、必死で物干しざおをつかもうと
するも届かない。しなる古いざお。

有 一 「親に仕送りをもらっているぶんくら
学生並みに今俺はぶらさがっている！」

葦 沢 「冗談を言っている場合か！ ロープ
に飛び移れ！ 折れるぞ！」

有 一 「俺はハリウッドスターか！！」
折れる物干しざお！

落ちた有一、綱をつかむ！ 落下し、
地面で碎ける物干しざお！

地上4階の高さに、綱渡り男と有一が
ぶらさがる！

葦 沢 「そのままゆっくり戻れ！ 事務局
員！ 体育会からエアマットを！」

綱渡り男、近くの偏屈城側へ。
しかし有一も偏屈城側へ進む。

葦 沢 「おい！」
有 一 「パンツ総番長！ 男と見込んで頼み
がある！」

パンツ総番長 「何だ！」
有 一 「偏屈王を、代わってくれ！」

パンツ総番長 「ハア？！ 俺の愛する女性の
為の芝居なんだ！ 言ったらう！」

有 一 「…その彼女は来たのか！？」
パンツ総番長 「（客席を見、首を振る）」

有 一 「男同士の賭けをしよう。その人が開
演までに来ず、ヒロインと俺が間に合うな

ら、俺に偏屈王を」

パンツ総番長「…」

有「…なんの因果か知らんが、今のヒロインは、俺が春からずっと後姿をおいかけたきた、俺の思い人」

パンツ総番長「…そういうことか」

有「彼女を抱きしめたい！ たとえ役の上でも！」

綱をつかむ手は震える。

固い地面ははるか下。

パンツ総番長「…命を賭けて舞台に来い！」

有「…ここで死んでたまるか！」

綱をつかみ、進む有。

偏屈城側にたどりつく。

○同、6号館屋上、風雲偏屈城、夜

満席の客。偏屈王ダイジェストビデオは、ちひろの「会いたい」の場面。

舞台裏に到着したちひろは、衣装を着ながら台本を読んでいる。

それを見る有、パンツ総番長。

パンツ総番長「可憐な子だな」

有「…そうだろうとも。…かの人は」

パンツ総番長「(首を振る) …芝居の経験は？」

有「…(首を振る) しかし、偏屈王に一番必要なものを持っている」

有「…どん、と自分の左胸を指す。

男二人は時計台を仰ぐ。時に6時10分。鉦を鳴らす小久保。

有「…」

パンツ総番長「…(背中をバンと叩く)」

× × ×

プリンセスダルマ、偏屈城へ。

ダルマ「風雲偏屈城にとらわれし、愛しの偏屈王さま！ ついにお会い出来る時が！」

城のゲートがあく。鎧兜姿の偏屈王。

西洋兜なので、中の正体はまだ不明。

ブルブル震え、右手右足が同時に出る。

偏屈王「…」

ダルマ「…？」

偏屈王「…」

ダルマ「（小声で）おおプリンセスダルマ」

偏屈王「おお。…おおプリンセスダルマ！」

ダルマ「偏屈王さま！ …（小声で）そなたの冒険を語ってたもれ」

偏屈王「…（小声で）そなたの？」

ダルマ「…（セリフをあきらめ）お顔を」

兜を取るダルマ。中から現れた有一に心底驚くちひろ。

ダルマ「（小声で）…どうしてここに！」

偏屈王「き、…奇遇だね」

どっと笑う客。

ダルマ「奇遇もなにも！ …私はあなたに会

う為、艱難辛苦を乗り越えてきたのです！

悪映画サークルみそぎ、悪の詭弁論部、

ミステリ研、アーチェリー部…。（ぼろぼ

ろと涙を流し始める）西部講堂前のパンク

した自転車、銀閣寺湯、真夏の古本市。…

桜咲く時計台を覚えていますか？」

舞台袖で聞く小久保とパンツ総番長。

小久保「…カンペをつくるんだった」

パンツ総番長「アドリブとは。だが素晴らし
い！」

ダルマ「（小声で）せんばい、愛してる」

偏屈王「まじで？」

ダルマ「（小声で）セリフですっ！」

偏屈王「あ。…愛してる」

ダルマ「…（小声で）つづけて！」

偏屈王「君の…。君の瞳を。君の黒髪を。君

の小さな姿、話す声。君はいい匂いがして、

肌がすべすべして。君のおともだちパンチ、

君の書く字、君の後姿。全ては汚い私を凌

駕する、驚くべき愛しさだ。…赤も似合う

ね（どっと沸く観客）」

小久保「（カンペをつくりながら舌打ち）」

パンツ総番長「パンツ一丁の愛につながれば、

なんでもいい」

偏屈王「俺自身はどうだ。俺は自分の理屈だ

けが自分の武器だと思っていた。だが君の瞳は、俺の真芯を貫いて全身を見透かす。そんなもの通用しやしない。俺の武器だと思ったものは、単なる鎧なんだ。正面から勝負しても勝てないから、格好つけて自分を大きく見せるカモフラージュなんだよ。こんな鎧。：あなたを思うほど、必要ない。大切に思えば思うほど：」

ダルマ「：！」

偏屈王「俺はまる裸になる」

パンツ総番長「今だ！」

ひもを引く小久保。衣装の仕掛けで、鎧がばらばらになり落ちる。有一はパンツ一丁に。観客拍手喝采。

小久保のカンペが間に合う。

偏屈王「(カンペを見ながら)パンツ一丁の愛を貫くと誓った。一年前、林檎の雨をこの身に浴びて以来。覚えているか」

向かいの屋上で聞いていた須田、立ち上がる。

ダルマ「：(須田のことを思い出す)忘れるものですか！ 何度生まれ変わっても、何度でも何度でも、私たちは会い続けるでしょう！ それが運命の力！ 私たちの、愛、：御大切なのです！」

偏屈王「さあ！ 栄光のキャンパスライフを我が手に！」

固く抱き合う二人。スクリーンに「大団円」の文字。万雷の拍手。

有 一「(うっとりし)死んでもいい」

○同、8号館屋上韋駄天コタツ、夜

樋 口「見事な孵化であった！」

羽 貫「やんやんやんや！」

大量の小さな達磨に手を伸ばす。

須田、向かいの屋上のパンツ総番長に声をかける。

須 田「あの！ まさか！」

パンツ総番長振り向く。

須田「一年前、林檎の雨とは！」
パンツ総番長「まさか」

樋口、花火に火をつける。羽貫、達磨
を次々に投げる。落ちてきた達磨達。

須田とパンツ総番長の頭に同時に落ち
て、ぽうんと跳ねる。夜空に開く花火。

須田「ふふふ…」

パンツ総番長「あはははは。あはははは」

舞台上で抱き合ったままの有一とちひろ。

有一、ちひろ「(同時に)再会できたんだ」

同じ事を言っぴっくりする二人。

○同、吉田グラウンドの後夜祭、夜

キャンプファイヤーを囲む人々。

祭りの余韻の中、グラウンドは片付け
られてゆく。

パンツ総番長は黒ずんだパンツを火に

投げ込む。風下の人達は苦しみ逃げ惑

う。笑う須田、羽貫、樋口、菲沢。

遠くからそれを見ている有一、ちひろ。

ちひろ「まさか先輩が偏屈王とは、心底驚き

ました。奇遇も良いところですよ」

有一「…奇遇、だったね」

ちひろ「即興ですよね、偏屈王の告白。先輩

は…芝居の才能もおありで」

有一「あれは、芝居じゃなくて…」

ちひろ「あれっ？」

有一「？」

ちひろ「先輩こそ、最北端のオモチロイ人な
のでは」

有一「…??」

○タイトル「冬」

○京大、講義室

ぼーっと講義を聞くちひろ。

○同、吉田構内、丁字路

ぼーっと歩くちひろ。

○同、中央食堂

食も進まず、ぼーっとしているちひろ。

○有一の部屋

ケータイを握りしめたままじっとして
いる有一。かけようとしてはためらう。
握りしめた赤い衣装の切れ端。

回想。後夜祭のキャンプファイヤー。

ちひろ「これから私の前に現れる時は、ご一
報ください」

衣装の端に書かれたケータイ番号。

○京大、中央食堂

ちひろの前に座る樋口と羽貫。

羽貫「なにをぼーっとしてんだい？」

ちひろ「なんか、だめなんです。ぼーっの中
のぼーっ、『世界ボーツとする選手権』と
いうものがあれば、日本代表も狙えるほど
のぼーっと加減」

羽貫「なんだそりゃ」

ちひろ「その三角柱の陰や、そのあたりに、
小さな狭間先輩が現れるのです」

小さな有一がそこかしこに。

ちひろ「そこでは不思議な踊りを踊り、そこ
では『奇遇だね』と素敵な笑顔を」

羽貫「あーあーあーあー。(ニヤニヤ)」

ちひろ「私は何かの病気でしょうか？ 風邪
ひとつ引かない丈夫なお子様だったのに」

羽貫、樋口、ニヤニヤ。

○今出川通り、寺の前、夕

ぼーっと歩く有一。何度もケータイを
開けるが、やっぱりやめる。

ピピピと電池切れの表示。

筆で大書した今月のひと言『うかうか一年』

有 一「…」

○鴨川デルタ前のコンビニ、夕

充電キットをケータイにさす有 一。

息を大きく吸う。

○京大中央食堂、夕

ちひろのケータイが鳴る。慌てて出る。

ちひろ「先輩!？」

羽貫、樋口、無音で拍手。

○鴨川デルタ、夕

有 一「あ。…(慌てて周りを見渡し)い、

いま、夕焼けが奇麗なんで、電話した」

○京大中央食堂、夕

ちひろ「どこですか? デルタ!」

行け、行けと指示する羽貫。

ちひろ「(息を大きく吸って)私もいつていいですか?」

羽貫、樋口、無音で拍手。

○鴨川デルタ、美しい夕焼け

ちひろ、大きく手を振って階段を下りてくる。有 一は亀の飛び石の上に。

ちひろ「(夕日を見て)きれい」

有 一「…この夕日が、一番好きなんだ」

ちひろ「…(ぎこちない)」

有 一「…あの。李白さん、という知り合いがいるんだけど」

ちひろ「李白さん! しばらくお会いしてないです!」

有 一「あ、…知り合いだったか。あの人が

えらい風邪を引いて治したので、明日木屋町で全快パーティーをやるらしく」

ちひろ「それはまたオモチロそうな！」

有「…よかったら、一緒に行かないか？」

ちひろ「！是非！」

有「…では、5時間前におちあおう」

ちひろ「ハイ」

有「…」

ちひろ「？」

有「…待ち合わせに最適な、喫茶店が」

美しい夕焼けに包まれる二人。

○京大中央食堂、夕

樋口「羽貫よ。俺はこの界限が好きすぎて、

この盆地から出るのが怖くて、だからお前を待たせすぎた。…来年、東京へ出ようと思うが、ついてくるか？」

羽貫「(茶を吹く)何でそんな大事なことをこんな所で！」

樋口「おまえと一番飯を食べた所だ。一番大事な場所だろう」

羽貫「…。アンタらしいね」

食堂の茶で乾杯する羽貫。

樋口「…最近、キレイになったか？」

羽貫「花は、何の為に咲くか知ってる？」

○夜、ちひろの部屋、有一の部屋を交互に

眠れないちひろ。眠れない有一。

二人、同時に外へ出る。

○深夜、京都のさまざまな場所

歩くちひろ。「白水」前、吉田神社裏

テント屋台、「久留味」前、進々堂前。

歩く有一。元田中を出て東大路へ。

百万遍交差点で絶妙にすれ違う二人。

ちひろ、デルタ、下鴨神社。

有一、時計台、西部講堂前。東一条から鴨川、木屋町。

○さまざまな場所の夜明け（冒頭と同じ）

東山から朝日がさす。木屋町、下鴨神社、時計台、学生街、デルタ。

二人が出会った全ての場所は、朝日に包まれる。同じ朝焼けを見る二人。

○進々堂、内

まだ2時すぎ。コーヒー3杯を空にし、有一は達磨を手に緊張している。

有一「…人事を尽くして、天命を待て」

さい、と開く扉。ちひろが入ってくる。

『ラ・タ・タ・タム』を胸に抱く。

窓際のあたたかな席に座る有一を見て、安心するちひろ。気づく有一。

ちひろ「こうして出逢ったのも、何かの縁」

ぺこりと一礼。長テーブル長椅子なので、ちひろは自然と有一の隣に座る。

微笑む二人。
暗転。

(了)

114分

○おまけ、エンドロール、李白の間

李白パーティーに集うオールキャスト。羽貫、樋口、東堂、赤川、高坂、康夫、奈緒子カップル、詭弁論部が飲み騒ぐ。少年、京福、老学者、千歳屋、本ニンゲン達は古本の山とたわむれる。パンツ総番長、須田、葦沢、相沢、劇団やサークルの連中が踊り狂う。皆を肴に笑う李白。有一とちひろがドアを開けた。パーティーはこれからだ。

あとがき

「ノッティングヒルの恋人」のように、とある街を舞台にしたラブコメは面白い。いつもの舞台でない旅情やエキゾチズム、独特な人たち。（東京の）よくある規格化されたラブストーリーにはない魅力がある。

この映画は京都が舞台だが、いわゆる京都すなわち舞妓さんや嵐山や懐石料理や観光案内ではない、リアルな普通の京都のひとつ、京大学生街が舞台だ。

昭和以前から変わらぬ町屋の町並み、古本屋、演劇のある日常、名物のめし屋風呂屋変なバー。早稲田、本郷、下北沢などの雰囲気、「京都」をかけあわせたものだとイメージしていただくのがよいかと思う。

「四畳半神話大系」はアニメならではのデフォルメが出色であったが、この映画は実写がむくと思う。木屋町のざわざわ感、下鴨神社の森の深み、京大学園祭NFの「己が情熱を無理強いする」光景。その実在の場所が、樋口、羽貫、李白、東堂、少年、パンツ総番長などの奇人変人（CGや合成を多用する、この映画のポップさのパート）を現実に着地させるだろう。京都をカラフルに、みずみずしく描くのだ。

有一とちひろの純な恋は、美しい風景におさめたい。デルタの夕日、進々堂の暖かい日差しや大文字山、京都の四季や透明な朝をフィルムに焼きつけるのだ。

2010年の春、たまたま「四畳半神話大系」を深夜に見て（バードマンの回だった）、京大学生街に再会した。俺は間違いなくあの中で8ミリカメラを持って走り回っていた。一番大事にしている風景を、もつとも面白い形で映画にしたい。この小説に出会わせてくれた千穂子に感謝する。

人事を尽くして、天命を待とう。